

持続可能な米作りの未来を守るために

開催 6月7日～8日 会場 JAグリーン近江

滋賀県の琵琶湖にほど近い「JAグリーン近江」にて、東都生協産直生産者団体協議会（産直協）米部会の会議が開催され、各地から産直センターやJAの担当者、卸業者、東都生協から役員が参加。「令和の米騒動」ともいわれる米不足や価格高騰、備蓄米放出による米価の混乱などを受け、各産地の現状や生産者の声などを聞く貴重な機会になりました。



米部会の皆さんと一緒に

利用する約束があるから生産できる 「食べる約束、作る約束」

「メディアが報じる情報に消費者があおられ、米の卸売業者が批判を受ける傾向にあります。この逆境をこれまでを振り返る良い機会と捉え、これからもベストを尽くしていきます」全農パールライス（株）米部会会長の言葉で、産直協米部会会議が始まりました。「産地直結の東都生協」であっても、米は集荷から乾燥、脱穀、選別、適切な環境での保管、精米などの過程が必要になるため、JAや卸業者の存在が欠かせません。

全国のJAは米の集荷に苦勞しながらも、農家が安心して生産を続けられるように、再生産できる価格を提示するなど、生産者をサポートする努力を続けています。産地は生産者の高齢化や離農の増加、異常気象などに悩まされながらも、化学合成農薬の削減に努め、環境に配慮した作物づくりに日々努めています。

私たちが消費者としてできることは何でしょう

それは「約束米」制度の利用です。また、安い価格を求め過ぎず、再生産可能な価格を理解して購入することです。農業の現状や背景にもっと目を向け、生産者を応援することに直結する「約束米」の利用を広げていきましょう。



米部会会議の様子



収穫した米を乾燥・貯蔵・選別・出荷するための巨大施設「カントリーエレベーター」

琵琶湖の環境を守る 「魚のゆりかご水田プロジェクト」

「魚のゆりかご水田プロジェクト」は、魚道づくりを通じて、琵琶湖にすむ魚が周辺の田んぼや用水路を行

き来できるようにする取り組みです。「魚のゆりかご水田」では、滋賀県「環境こだわり農産物」の取り組みとして、使用する化学合成農薬・化学肥料を通常の5割以下としています。

琵琶湖にすむ魚たちは、産卵の時期になると浅瀬に寄ってくる習性があります。その習性を生かし、田んぼの排水路に板を設置して魚道を作ること、田んぼまで遡上し、産卵できる環境を作っています。田んぼの水は琵琶湖より水温が高く、えさとなるプランクトンが豊富。琵琶湖にすむ外来種のブラックバスなどは遡上する習性がないため、外敵が少ない環境になります。

ふ化した稚魚たちは、この「ゆりかご」のような田んぼで育ち、中干し（出穂前に一時的に田んぼの水を抜く作業）の時期に魚道の板が外されると、琵琶湖に帰っていきます。

魚道にいる魚たちの「生きもの観察会」

「魚のゆりかご水田プロジェクト」を知ってもらうために、田植え体験や生きもの観察会、稲刈り体験、魚のゆりかご水田米の販売会などさまざまな体験会やイベントが行われています。6月8日に開催された「生きもの観察会」には、漁協関係者や地域の子供たち、農協の組合員親子、近隣の大学生など約250人が参加。3本の魚道にいる大きなニゴロブナやコイ、ナマズ、小さなカブトエビなどの生きものの調査を行っていました。

こうした生きものたちが田んぼを自由に泳ぐことで水面が濁るので、アイガモ農法のように雑草が生えにくくなっているそうです。田んぼにすむ魚を大切にする農業が琵琶湖の環境を守ることに繋がっています。



観察会の様子



産地直結ひとすじ。いちばん頼れる生協に。

共同購入事業部 組合員活動推進グループ

☎03(5374)4756 月曜～金曜：午前9時～午後4時

E-mail: kumikatsu@tohto.coop

〒168-0073 東京都杉並区下高井戸5-4-42 さんぽんすぎセンター2階

東都生活協同組合

今月のつばやき

10月末から読書週間が始まります。1947年に「読書の力によって平和な文化国家を創ろう」という趣旨で開催され、以来毎年各地で講演会や本に関する展示会が開かれているそうです。私も秋の夜長、読書サークルに参加しています。1冊の本について、家族や友人以外の人たちと話をするのは新鮮な気持ちになります。(A.K)

お問い合わせ